

# 奥州平泉文化の源流

□「後三年」の決戦地

後三年の最後の決戦地は金沢柵。記録には、沼柵と違って壁が建っているという表現がされており、断崖絶壁の場所とい

われている。

沼柵の段階では数千騎だった。しかし、最終決戦の地では源氏側が2万騎の軍勢を金沢柵に派遣したという記録がある。で、非常に多くの兵を集めてきたことが分かる。



大鳥井山遺跡の二重の土塁と堀（横手市教育委員会提供）

金沢柵は、絵巻物を見ると、堀や塀、櫓が描かれている。切り立った壁に堀をめぐらせていて、その境目には櫓がある。

金沢柵の場所はまだまだよく分からないが、同じ横手市に大鳥井山遺跡という遺跡がある。まさに絵巻物にあるような遺構が見つかっており、ここは鳥海柵より一足早く10

（平成22）年に国史跡の指定となった。大鳥井山を見ていただければ、金沢柵をイメージできるのではないかと思う。

肝心の金沢柵がどこなのか、結論は出ていない。中世の城跡である金沢城跡というのがあり、その中にあるのではないかと現在発掘調査を進めている。

□合戦と浄土思想

後三年合戦を経て、最終的に源氏側が勝利し、

負けた方の清原の関係で唯一生き残ったのが清衡。清衡が31歳か32歳のころになる。

清衡が平泉に拠点を移すのが50歳前後なので、その間20年近い歳月がある。それぐらいの時間をかけて岩手・秋田の支配権を固めて、中央に認められるようになった。

この戦いの後、清衡は本拠地を現在奥州市である江刺郡の豊田に移して、かつて安倍・清原が支配していた岩手県南部と秋田県横手地方を引き継いで支配していく。

平泉に移った後は、清原から父方の藤原に姓を戻した。平泉に移った段階で、清衡の支配が及んだ範囲は、南は福島県の白河の関から青森県の端まで、1万余りの村々に拡大していった。

清衡は、ご存じの通り、中尊寺金色堂を建てた。その建立趣旨が記録に残されている。

奥羽、岩手・秋田の地は戦で多くの人命が失われてしまった。敵味方を問わず失われたものたちの魂を慰め、極楽浄土に導くためにつくった。清衡の思いが伝わってくる。

前九年、後三年という非常に不幸な大きな合戦を2度も経験し、身内同士の戦いというものも、晩年の清衡の思いに影響を与えた。言い換えれば、身内の不幸な出来事を繰り返さないという強い思いが、世界遺産である平泉をつくったと考えられる。

翻って、平泉をさかのぼって考えていくと、平泉の源流というのは後三年合戦にあつて、さらにはさかのぼって前九年合戦にある。その起点にはやはり鳥海柵があるのだというのを地元の方々に話していただく必要がある。

鳥海柵、前九年合戦関係の地元のみならずには、対比となる後三年合戦と清衡のことも知っていただきたい。いろんな形で見て対比していただけたらと思う。あるいは、県、市、町の枠を超えた交流というのが、鳥海柵の活用につながるためにも必要になってくるのではないだろうか。

## 鳥海柵を知る

金ケ崎の国指定史跡

— 町民大学 2013 シンポジウムより —

9

高橋 学氏（秋田県埋蔵文化財センター主任文化財専門員）

## 安倍氏から清原氏・藤原氏へ ①



戒谷南山筆「後三年合戦絵詞」から金沢柵「千任の口いくさ」の場面（横手市教育委員会提供）

□対比から交流へ

安倍、清原というものを対比して考えていく上で、私なりの考えを述べさせていたがたい。

岩手県内には「安倍館」という地名が多くある。

一方、秋田県内には400以上「〇〇館」という地名があるが、「清原館」というのは一つもない。

逆に、秋田県でありながら、「あべだて」とか「あんばいだて」というのが何力所がある。この違いが何なのか、非常に興味を持っている。安倍氏、清原氏の人となりや考えることは難しいことだが、一つの取っ掛かりになるのではないかと考えている。

鳥海柵、前九年合戦関係の地元のみならずには、対比となる後三年合戦と清衡のことも知っていただきたい。いろんな形で見て対比していただけたらと思う。あるいは、県、市、町の枠を超えた交流というのが、鳥海柵の活用につながるためにも必要になってくるのではないだろうか。